海外で活躍する建設コンサルタント技術者が、独特の目線で各国を紹介するコーナーです。

OVERSEAS 海外事情

The Democratic Republic of Timor-Leste
― 東ティモール民主共和国 ―

コロナ禍の東ティモール渡航記

上田 実和子　UEDA Miwako
いであ株式会社／海外事業本部／海外事業部／海外技術部／研究員

防護服とマスクのコーディネート

入国審査を待つ行列

東ティモールの基礎情報

東ティモール民主共和国はオーストラリアのダーウィンの北約300km、インドネシア東部の小スンダ列島の最東部ティモール島に位置しています。国土面積は約14,900km^2（東京、千葉、埼玉、神奈川の合計面積とほぼ同じ）であり、首都はティモール島にあるディリで、モールが一つある以外は、ポルトガル占領時代の建築物と素朴な街並みが残る愛らしい小さな町です。海岸沿いには各国の大使館が立ち並び、国内産の挽きたてコーヒーが飲めるカフェやビーチが人々の憩いの場となっています。

一方、東ティモールは16世紀頃よりポルトガルによる植民地支配、第二次世界大戦時の日本による占領、インドネシアによる軍事侵攻・併合が続き、独立を果たした2002年以降も大統領と首相が武装勢力に襲撃される等、数々の情勢混乱に苦しんだ国でした。2008年の治安回復までに、政府機関関連施設やインフラ等が破壊されてきており、また、インドネシア侵攻時代以前の既存インフラの管理・運営に関するナレッジが十分に引き継がれておらず、国内のインフラ整備を最優先課題としているものの、時間を要しているようです。

東ティモールへの渡航目的

2021年4月には数日間降り続いた豪雨により、小河川や排水路が氾濫し、ディリの大部分が冠水しました。それにより、道路や護岸、住宅が被害を受け、死者48人、10,000人以上が避難する災害となりました。また、山岳地域では土砂崩れと地滑りが発生し、道路や橋梁、給水施設が被災するとともに地方都市間の移動が困難となり、地方部の被災状況の把握に支障が生じました。

これを受け、東ティモール政府、日本政府並びに独立行政法人国際協力機構（JICA）の三者による「より良い復興を目指す政府の取り組み」を支援するための技術協力に関する対話が行われ、「東ティモール国ディリ洪水対策情報収集・確認調査団」が発足しました。そして私は、首都ディリの災害に強い街づくりにかかる被害状況・洪水被害発生メカニズム等の分析・把握のため、業務調整及び住民避難支援担当として東ティモールに渡航しました。

コロナ禍の入国

渡航は2021年9月上旬、東京はデルタ株流行に伴う4回目の緊急事態宣言が終盤に差し掛かり、欧米では徐々に海外旅行者も増加している頃でした。同業界でも海外渡航が再開されていましたが、まだコロナ禍で入国規制が厳しかった特殊な東ティモールへの渡航経験を記します。

2022年6月時点では既に廃止されていますが、当時はPCR検査結果、隔離期間滞在ホテルの確保、入国許可に類する書類等の準備が必要でした。東ティモール政府のウェブサイトがタイムリーに更新されておらず、またエージェントも情報を持っていなかったため、入国に必要な情報をありとあらゆる方法で収集しました。例えば隔離ホテルは、そのホテルのFacebookページで隔離期間の受け入れをしていることを知りました。のちに分かりましたが、東ティモールではFacebookが最新情報の発信場として頻繁に活用されているようです。

渡航前夜にPCR検査結果を受け取りやっと入国書類が全て揃い、あとは飛行機に乗り込むだけと思われましたが、成田のチェックインから大変でした。多くの場合、東ティモールに渡航する際はマレーシアで乗り継ぎになり、経由地クアラルンプール空港では別ターミナル出発のため、一度出国して荷物を受取り、預け直して移動する必要があります。

一方、コロナ禍では、トランスファーの渡航者はターミナル間の移動が規制されていたため、幸いにも同ターミナルからの出発でした。しかし、成田発の航空会社は乗継便との提携が無いため、複数区間で預け荷物を一括で手続きできるスルーチェックインが容易では無く、事前に説明をしていたものの、このお願いと手続きに1時間程要しました。そうしてやっとクアラルンプールに到着すると、トランスファーチェックインや荷物タグの再発行手続きにさらに1時間以上を要し、飛行機に乗り込む際には不織布のような素材の防護服（てるてる坊主と宇宙服の間のフォルムのような服）の着用を求められました。飛行機は帰国者と国連・NGO等の外国人で満席で、旅慣れた様子の人々も同じような手続きで疲れたのか皆ぐったりしていました。

東ティモールのディリにある国際空港に着陸すると、空港施設に入る前に防護服を着たまま全身消毒し、検温、入国書類の確認が行われましたが、30℃の炎天下の中、かろうじて屋根のついた屋外の通路で1～2時間待たされました。家を出発してから既に30時間程経っており、心底ぐったりしましたが無事に入国しホテルに移動しました。

首都ディリには2カ月程滞在し、東ティモール生活のほんの一部を垣間見て、分かったことをお伝えします。

食べ物

ディリ市内各所にはインドネシア料理屋さんが多く、現地の方も利用している印象です。空港近くのMie Ayam（鶏肉と青菜がトッピングされた透明鶏スープの麺）屋さんは、甘辛く煮た鶏肉と鶏スープが合わさって大変美味です。インドネシアの場合、インスタント麺が使われることが多いですが、自家製と思わしき卵麺がモチモチで個人的には好みでした。その他、ポルトガル人が経営するポルトガル料理屋や諸外国のレストランがあり、どこも美味しいです。旅行者や各国の駐在員によるGoogleマップの口コミが参考になります。インドネシア料理に近い東ティモール料理を提供するレストランもあるようです。

また、有機栽培のシナモンやカルダモン、バニラ等のスパイス、モリンガ（葉っぱのスーパーフード）をお土産にしたところ女性ウケ抜群でした。特にシナモンは味や香りが芳醇で大変美味しく、値段も200gあたり1US$と格安でオススメです。もちろ

ん、東ティモール産のコーヒーを飲めるカフェもいくつかあり、週替わりで異なるエリアで取れたコーヒーを飲ませてくれます。

逆に、高級品となる豚肉・牛肉は固くてあまり美味しくありません。冠婚葬祭時に親戚・友人一同で牛1頭丸ごとを分け合って食べる文化があるそうで、トラックの荷台にバナナの葉でドレスアップした牛が遠い目をして静かに輸送される姿を時たま見かけました。

ポルトガル料理

プラスチック製品の陳列棚

生活

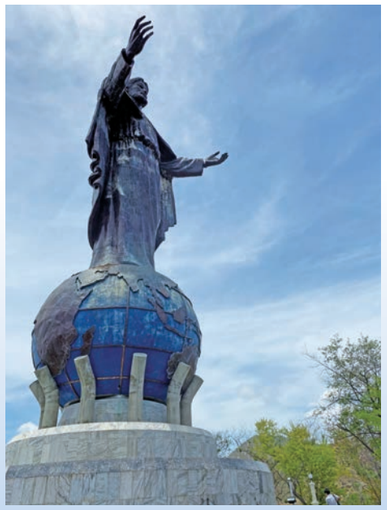
東ティモールの物価は、日用品の多くがインドネシア又は中国からの輸入のため若干高いですが、思ったよりも品揃えは悪くなく大体のものは現地で揃います。ただ、一番困ったのは、プラスチックの保存容器とラップが劣悪かつ約4US$と高価だったことです。保存容器は大きなサラダ用ボウル程度に大きいものばかりで、程よいものを探すのに2週間程掛かりました。ラップは皿にくっつかない材質のため保存には不向きです。東ティモールで自炊の予定がある方は日本から持って行くことを強くお勧めします。

街と人々

ディリ周辺で最大の観光名所であるCristo Reiは、世界で3番目に大きなキリスト像で、晴れているとそこからディリ湾が望めます。また、街中にはポルトガル建築の白い壁が印象的な政府施設や博物館等がちらほら見受けられます。ディリの住宅街では、ブロック塀やコンクリート塀にトタン屋根の住宅が多く見られました。洪水の影響で1カ月以上浸水していた家もあり、壁には最大2mほどの浸水跡が未だ残っています。被害を受けた人々は、未だ教会に建てられたテントや仮設住宅で国際機関等の支援を受けながら避難生活を続けています。

外出制限中は静かな街並みでしたがそれが解除されると、週末はビーチでバレーボールをする子どもやランニングする人であふれ、夜には焼魚や焼鳥の屋台が並び、地元の若者等で賑やかになりました。

東ティモールの公用語は世界で一番簡単な言語とも言われるテトゥン語です。テトゥン語とインドネシア語以外の地方の言葉や書き言葉としてポルトガル語も使われます。インドネシア侵攻の影響で40歳以上はインドネシア語を話し、それ以下の世代はテトゥン語で教育を受けたためテトゥン語のみを話すと聞いていましたが、インドネシアのテレビを見るために、若者もインドネシア語を話せる人が多いとのことでした。


Cristo Rei

Cristo Rei付近の海岸線

住宅に残る浸水した跡

避難生活を送る家族

しなやかな強さ

私自身、渡航するまでは内乱が記憶に新しく、災害にも見舞われ、生活に追われているイメージがありました。しかし、実際に政府の担当者や避難家族などの現地の方々と話してみると、南国特有の陽気さの中にも気丈さがあり、前向きに現状を語られている印象を受け、これには「抗争と平和構築の繰り返しを経験したからこそのしなやかな強さなのかな」と勝手ながら推測しています。

今ではコロナ禍の渡航規制も緩和され、前述したような煩雑な渡航手続きは大幅に省略されているはずです。今後、東ティモールに渡航された方に「そんなに渡航が大変だったなんて考えられない」と笑って言ってもらえる時代が早く来ることを願っています。少しでも東ティモールの愛らしさが伝われば幸いです。